

津本陽 作「椿と花水木、万次郎の生涯」読売新聞社 1994年3月15日刊を読む

- ホイットモア船長は万次郎の熱意に動かされた。

「分ったよ。マンのような敏腕な航海士にただばたらきをしてもらうなんて、私が礼をいわなければならぬほどだ。三人の乗船はもちろん許可するよ」

伝蔵たちは十年前には文字を知らない炊夫^{かしき}にすぎなかった万次郎が、いまではメリケの難解な航海術をわがものとした高級船員になり、彼らにとっては口もきけないほどの威厳にみちたキャプテンと対等に交渉できるのを見て、感嘆した。

「蟹は己れの殻^{かに}に似せて穴を掘るちゅうが、万やんの殻はよっぽど大きかったんじょ」

三人がサラボイド号で日本へ向うことを知ったデイマン牧師は、わがことのようによこぶ。

彼は早速ハナロロ駐在のアメリカ領事に頼んで、万次郎たちのために正式の身分証明書を発行してもらった。

日本語をたどたどしくあやつる万次郎が、日本へ上陸したのち幕府からアメリカのスパイとの嫌疑をかけられたとき、それが役立つであろうと思ったからである。

身分証明書はつぎのような内容であった。

- 「ハワイ諸島ハナロロ、アメリカ合衆国領事館。

ハワイ諸島ハナロロ駐在のアメリカ合衆国領事エリシア・H・アレンは、この証明書の提示を受けた人々に対し、敬意を表するものである。

ジョン・マン、伝蔵、五右衛門は一隻の漁で日本列島の東南部から船出して難船し、約六カ月間を無人島で送ったのち、アメリカ捕鯨船ジョン・ハウランド号のホイットフィールド船長に救出され、サンドウィッチ諸島に伴われてきた事実につき、確実な証拠あるものをご理解願いたい。

伝蔵と五右衛門は当地に滞在し、万次郎は捕鯨航海に出て、1843年アメリカ合衆国に到着し、教育を受けた。

彼はアメリカに三年間滞在し、農業、樽製造技術の習得と通学に日を送った。そののちふたたび捕鯨航海におもむき、1849年に合衆国に戻った。

さらにアメリカ合衆国の金産地カリフォルニアに向ったのち、去る十月にハナロロに到着した。

ホイットモア船長は、アメリカ合衆国籍の船舶サラボイド号に彼らを乗船させ、琉球諸島附近で彼らを下船させることを、好意をもって承知した。

ハナロロの友人たちは、航海の準備のためさまざまな援助を彼らに与えた」

総領事は万次郎たちについての懇切な紹介をかさねる。

「彼らと対応する方々には、好意をもって待遇して下さるようお願いする。私は海員友の会の牧師から、万次郎は品性高尚な秀才であると聞かされている。

彼はアメリカ人がどれほど日本人と親密になるのを望んでいるか、日本へ船舶をさしむけ産物を購入したいと考えているかを、同胞に語るだろう。

西暦紀元 1850年12月13日

ホノルルの当領事館に於いて署名調印する。

エリシア・H・アレン合衆国領事」

- この身分証明書は 12 月 14 日付のフレンド紙とポリネシアン紙に掲載された。
デイマン牧師はさらにポリネシアン紙 12 月 14 日号に、「日本への遠征」という見出しで、万次郎たちの帰国についての助力を読者に求めてくれた。
- 「彼はオアホへ帰ってきて昔の漁夫仲間と会った。仲間の二人は彼とともに日本へ帰国したいと
いった。
彼は捕鯨用ボート一隻と附属品を購入した。メキシコのマサトランからきてチャイナのシャンハイへ向うアメリカ船サラボイド号のホイットモア船長は、彼らを乗船させ琉球諸島のどこかで下船させ、日本へ向わせることを承諾した。
彼らの必要な品物のうち、羅針盤、性能のいい猟銃、いくらかの衣類と靴、1850 年度の航海暦が不足している。
篤志家によるご寄付、ご援助あらんことを。
寄託下さった品物の伝達については、下記に署名する者が絶対の責任を持つものである。

S・C・ディマン」

- フレンド紙、ポリネシアン紙に掲載された記事の反響はただちにあらわれた。
デイマン牧師のもとに、さまざまな品物が届けられた。
「ハナロロの衆から、こげな力添えをしてもろうて、うれしゅうてたまあるか。この礼はいずれは返さ^{ばち}にゃ罰があたらあ」
- 万次郎は日本へ持参するさまざまの品を買いもとめるため、港の商店街を巡り歩く。
マッチ、ガラス板、ガラスの徳利、ガラスのイヤリング、絹のハンカチ、石鹼、医薬品、鉛筆、ペンとインク、懐中時計、多くの地図と十数冊の書物、猟銃一挺、拳銃二挺、などである。絵具一揃いはフェアヘブンから持参したキャサリンの形見であった。ほかに望遠鏡、鍋、^{なべ}斧、^{おの}大工道具、釣糸、缶詰、飲料水の樽も用意した。
万次郎はあわただしい帰国支度のあいだに、フェアヘブンのホイットフィールド船長あてに、これまでの恩を感謝する手紙をしたためた。
- 「私は小さな少年の頃から大人になるまで育てて下さったあなたの慈愛のお心を忘れはいたしません。
私はいままでのご厚情に何も酬いることなく過ごして参りました。いま伝蔵、五右衛門とともに故郷へ帰ろうとしております。
ご恩返しもしないのは許さるべきことではありませんが、世界がどんなに変わっても私は善意のみを信じつづけ、ふたたびお目にかかれるのを待っています。
農場に残してきた金貨、銀貨、衣類などは有益なことに役立てて下さい。私の本と文房具は私の友人たちに分けてやって下さい。

ジョン・マン」

P58 ~ 61

<コメント>

ジョン・万次郎の生涯を知るのに、本書ほど取り掛かりやすい作品はないと確信します。日本の平和、日本とアメリカの関係を考える絶好のテキストです。是非、お読みください。

2022 年 12 月 17 日(土)林明夫